



親子関係と

幼児の社会的行動

小 嶋 秀 夫

へはじめに——問いの設定へ

園で子どもたちが發展させていく行動の型には、じつにさまざまなものがある。なかまといっしょにいきいきと活動する子、集団活動に参加できず孤立している子、すぐ乱暴する子など……。このような差は、なにによるものであろうか。

園での子どもの行動を規定する要因は、次の二つにわけて考えることができるであらう。

一つは、子どもの生物学的素質および子どもが家庭や近隣社会での経験を通して身につけてきた行動の型であって、子どもはそれによって園に入ってくるのである。その中心をなすのは家庭であって、その中でも親子の人間関係が、子どもの行動の型の決定にとって、もっとも直接的な条件であると考えられる。

他の一つは、園の物理的条件や、教師や他の子どもとの人間関係

などといった園側の条件である。この二つはおたがいに無関係というわけではない。しかし教師の立場から考えると、前者は、与えられたもの、すでに決定されたものという感じが強いのにたいして、後者は、教師の働きかけの余地の残されているものといえるであらう。ここより、次のような問いがでてくる。

一、どのような親子関係をもっている子どもが、どのような行動を示すのであろうか。

二、子どもの行動は、園側の条件とどのような関係をもっているのであろうか。

すべての子どもが、家庭で理想的に育てられてきたとはいえない。子どもはなんらかの歪みをうけていることもあって、それは園での行動にあらわれる。もしそのような歪みがあれば、できるだけ是正していくことが、教育の中心的課題の一つとなる。それには、親に

たいする働きかけと、子どもにたいする働きかけとが含まれる。この小論は、このようなことを念頭におきながら、先にのべた問いに、一つの答えを与えんとするものである。

〈手続き〉

被験者

京都市左京区、F保育園、S組四十七名（男児 二十七、女児 二十）。二年保育および三年保育の年長組。

親子関係の評定

家庭が子どもに対してもつ機能は、保護および社会化であるとされている。保護とは、無力な存在である子どもの欲求を充足させ、社会の圧力から子どもを守る作用である。社会化とは、子どもをして、自分の好きなようにはなく、ある定まった様式にしたがって行動させ、社会的に承認された規準を獲得させる作用である。

サイモンズは、親子の人間関係を、受容—拒否、支配—服従の二次元を中心として考えた。これは先にのべた家庭の二機能——保護と社会化にほぼ対応しているし、その後の多くの研究者によって、もっとも根本的な次元として認められている。私の研究も、この考えにもとづいて、親子関係を、愛情（親は子どもにたいしてどの程度の愛情をもっているか）および強制（親はじぶんの思うとおりに子どもを支配するか、子どものいいなりになっ

ているのか）の二次元を中心として考えた。評定は保母によりなされた。

子どもの行動の測定

子どもの行動はいろいろの側面から把握されなければならない。私は、外面的行動を、行動評定表、時間見本法による自由あそびの観察、自然観察によって、内面的行動を、絵画—欲求不満テストによって把握せんとした。ここでは、行動評定表のみについて報告することにする。これは園での子どもの行動を把握しようとするもので、「独立性」、「攻撃性」など、社会的行動を中心とした十五項目よりなっている。評定者は担任の保母と私とであるが、ここでは私の評定結果を用いることにする。

園側の条件の測定

園側の条件といっても多くあるが、今回は子どもたちの人間関係をとりあげた。それはソシオメトリーによって測定された。ソシオメトリーにより、クラスの力学的構造の把握を試みた。

幼児にソシオメトリーを実施することには、いろいろ問題もある。しかし私は、幼児にもソシオメトリーは実施可能であり、意味あるデータが得られると思う。それには、子どもから正確な反応をひきだすための工夫が必要である。私はビーカーという人の方法を参考にして、子どもの顔写真の切りぬきと線画を用いたが、これはかなり信頼してよい方法だと思う。おのおの子ども

行動評定得点 (平均T得点)

指導性

社会的地位		上	中	下	合計	人数
親の態度						
CH	(比較的強制的群)	62.0	50.5	49.0	53.9	20
CL	(強制的群)	54.5	46.5	44.3	47.1	27
合	計	58.5	48.4	45.2		
人	数	13	23	11		47

がうけた選択(他のものから「好き」といわれる)数から、排斥(他のものから「嫌い」といわれる)数を減じたもので、子どものクラス内での社会的地位をあらわした。

〈結果〉

子どもの社会的行動に大きな影響をおよぼすのは、親がおこなう強制である。子どものいいなりになっている親の子ども(C L群)よりも、どちらかといえば権威を行使することが多い親の子ども

(C H群)のほうが、高い行動評定得点をとっている。C H群のほうが、友人や保母との言語的交渉も活発で、指導性に富み、なかまからも受け容れられて人気があり、活動的で人前でもしっかりとふるまい、依存的でなく、表情もあかるい。しかし攻撃性も強い。(以上はすべて統計的に有意) そのほか、他から攻撃されたときは自分を防禦することができ、気分が安定していて、社交性もあり、周囲

に対する関心も高い傾向がみられる。(以上は統計的に有意に近い)ただ、親切さには差がみられない。

子どもの行動は、クラス内での社会的地位とも関係がある。次表は、一例として、指導性の得点と、親の態度、子どもの地位の三つの関係を示したものである。先に、C H群のほうがC L群よりも指導性があるといったが、それは表の合計の欄の五三・九と四七・一とを比較していったのである。しかし子どものクラス内での地位との関係をみると、地位の高いものほど指導性も高いことがわかる。C H群でも、地位が中や下のものは、C L群の地位が上のものより指導性が低くなっている。(統計的には有意でない)

〈結果の考察〉

このデータはなにを意味するのであろうか。子どもの指導性は、親子関係によっても影響をうける。しかしクラス内での地位とも関係があるといえる。指導性が高いからクラス内での地位が高くなったということは考えられる。しかし同時に、クラス内での地位が高いから指導性が高くなったということも可能である。実際には、両方が作用しているのであろう。クラス内での地位は、その子どもの人格にも関係し、したがってそれは親子関係の影響によるものでもあることは疑いない。しかしクラス内での地位は、もっと他の要因によっても影響される。

本研究のデータだけからいうのは危険であるが、一般に次のようにいうことが可能かもしれない。子どもの指導性を例にとると、それは親子関係によって規定される。しかし同時に、クラス内での地位とも関係するから、その地位を変えることにより、子どもの指導性が高まる可能性がある。たとえば、家庭では自分の思うがままに行動していたような子どもは、指導性が十分発達していない。教師がその子どものクラス内での地位を変えることによって、その子どもの指導性が高まっていくかもしれない。そうすれば、その子どもの地位はだんだん高くなってきて、行動に進歩がみられるようになるかもしれない。

ここでは、クラス内での地位だけをとりあげた。しかし子どもたちの人間関係は、地位関係だけでは把握されない。また、教師と子どもとの人間関係も極めて重要である。それらが一体となって、子どもに働きかけるのである。

〈おわりに——現場での実践〉

子どものクラス内での地位を変えるにはどのようにすればよいのか。ジャックという人は、消極的な子どもに一定の訓練をほどこし、ふたたびもとの小集団へ戻してみるといふ実験をした。私は西岡忠義（当時、京大助手）と共同で、社会的参加のできない消極的

な子どもを中心としたグループをつくり、指導した。一週に一、二回、一回に四十―五十分で約一か月半、他からの影響を排除した条件でおこなった。主な方針は次のようなものである。一、かれらは、他の子どもや保母といっしょでは、圧迫を感じて伸びのびと行動できない。しかし内部には、うっ積したものがあつて、それをはき出させ、伸びのびさせること。二、あそびや話し合いを通して、いろいろの役割をもたせ、自信をつけさせること。三、友人関係を形成し、安定感をもたせること。四、かれらの変容が、クラスの他の子どもによつても知覚され、受容されることによって、かれらが自信を深めていくこと。期間が短かつたので、十分効果があつたとはいえないが、幾人かのものには、クラスでの行動に変容がみられるようになった。今のべたような訓練も有効であらう。また、幼児の集団は教師の影響をうけやすく、教師の賞賛や叱責、役割を与えたり、小グループを形成したりすることもあるであらう。

子どもの個人的な心理治療が必要な場合もある。それと同時に、クラスという集団全体にたいする働きかけが必要である。子どもを、ひとりひとりバラバラのものとして把握するのではなく、集団の中の子どものとして把握、集団の作用を利用した働きかけが必要とされよう。そこにおいて、教師の役割は極めて重大である。子どもの発達段階に応じて、子どもひとりひとりの状態に応じた働きかけが望まれるのである。

（京都大学）